平成 21 年度 スタンフォード大学海外研修 派遣報告書

㈶厚生会 仙台厚生病院 後藤光範

1. 参加した目的と達成度について

私がこの度，海外研修に参加したのは大きく分けて 2 つの目的があった．1 つはスタンフォード大学の研究に対する取り組み方を知ること，もう1つが各種画像を3Dや治療に利用するに当たっての取り扱いについて学ぶことだった．スタンフォード大学では研究と臨床は全く別に行われている．しかも，RT はそれぞれ専門に分かれており，他のモダリティの事はよく知らないといっていた．日本に多い，臨床でいろんなモダリティを担当することで視野を広め，研究にも幅を持たせることができる，といった考え方とは対称的だと感じた．しかし，スタンフォード大学の研究では，非常に他業種の人が関わりあって行われている．それぞれ個別に研究を行うことの多い日本との違いを感じると共に，単一モダリティしか担当しないことによるデメリットを広い分野との関わりによって補っていると感じた．2 つ目の画像の取り扱いであるが，こちらも 3D 画像を一元的に管理している “3D ラボ”の説明，見学や，様々な最新の臨床研究での画像を紹介していただいた．3D 作成に関してはある程度プロトコルが組んであり，誰でも同じ基準で画像ができるようにしてあるとのアメリカらしいシステマティックな面もある一方，造影失敗や心位相の確定困難な症例などはどうしているのかとの質問には“がんばる”と日本と同じ様な一面も見られた．また，炭素を標識した Hyperpolarized MRI など画期的な研究画像を見せていただき，画像診断の限りない可能性を感じることができた．大変満足のいく充実した研修内容であったと思う．

2. アメリカの放射線診療の利点と問題点において

アメリカでは優秀な RT はより高い報酬を求めて職場を変え，その度にステップアップするとのことだった．そのため自らの存在意義をアピールするために高いレベルの技術を求める RT が多く，専門性を高めるシステムが出来たのではと思う．しかし専門性に偏ることで，広いモダリティを経験することによる複合的な研究の立案などは難しく，そういった点においては日本の方が柔軟性に優れていると感じた．

3. 今回の研修で得られたことを今後どのように活かすか

今回の研修に参加して，世界最先端の技術を学ぶと共に，その開発や研究に至る過程なども知ることができた．アメリカ医療のシステムや考え方も体感した．これを今後の自分自身の研究の企画立案や取り組み方に，臨床での創意工夫に活かしたいと思う．また，毎晩夜遅くまで語り明かした研修生同士の会話も自分の中で大きな刺激になった．この貴重な経験を自分のものにするだけではなく，他の人にも広く伝えられればと考えている．

最後になりますが，本研修にあたりこのような機会を与えていただいた日本放射線技術学会，GEHC の皆様，広島大学木口雅夫団長ならびに仙台厚生病院山田文夫技師長，加賀勇治名誉技師長をはじめとするスタッフの皆様に感謝申し上げます．本当にありがとうございました．

最後に空港で撮った集合写真
定番になった No.1！のポーズで（一番左が著者）